

着床前診断を受ける夫婦の思い～患者インタビューを通して～
Mental Status of the PGD couple analyzed from patient interview

医療法人三慧会 I V F 大阪クリニック

○高谷志保 田邊加代子 澤辺麻衣子 小松原千暁 福田愛作

I. 緒言

PGD (Preimplantation Genetic Diagnosis) は、着床前の胚から細胞を一部取り出し、染色体や遺伝子異常の検査をすることをさす。PGD を希望する夫婦は習慣流産や重篤な遺伝性疾患児の出産を経験し、原因究明の為に染色体検査や遺伝子検査を既に受けている。検査結果の告知を受けることは当事者にとっては深刻であり、患者は結果として治療に対する次の選択を迫られることになる。そこで本調査は、PGD を受けた A 夫婦にインタビューを実施し、夫婦の心理過程を考察したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象：日本産科婦人科学会の承認を受け、PGD により得られた正常胚の移植を受け妊娠成立し、出産施設へ転院した A 夫婦。
2. 方法：転院日、A 夫婦の担当看護師 2 名が、初診から PGD を受けて妊娠に至るまでの思いを夫婦同席 20 分と個別 20 分のインタビュー調査をした。インタビュー実施前に、個人情報守秘義務、倫理的配慮について伝え、同意書に署名を得た。
3. 分析方法：半構成的面接により自由に語ってもらい、内容は逐語録にまとめ、質的分析を行った。

III. 結果

妻は 1 度目の流産時、「信じられないという喪失感が強かった」と語った。夫は血液染色体結果の開示を受け、「妻に対して申し訳ないという気持ちがあった」という発言が数回に及んだ。状況を理解できるまでには、遺伝カウンセリングを数回受け、本やネットでの自己学習を重ねたという。また、PGD の結果が出るまでの約 1 か月半は「期待と不安で複雑な気持ちであった」、妊娠後も「心拍が見えるまで、流産の不安が大きかった」と語った。来院時の対応は、特定の医師・看護師数名が関わる事で「安心感があった」と話した。

IV. 考察

A 夫婦は流産時と検査結果開示に関する発言から、衝撃・退行の経過をたどり、診察医や看護師の説明、遺伝カウンセリング、自己学習でその時々状況を理解し、承認・適応の過程に進むことができたと考えられる。このことから A 夫婦はフィングの

危機モデルの経過をたどっていたと推察できる。妊娠後も過去の流産経験により、適応の過程に至った場合でも、常に不安のある状況であり、退行と承認・適応を繰り返しながら治療を受けていたと言える。